中村俊定文庫
文庫 18
628

宮城県図書館蔵

獨吟廿哥仙下

第十一

赤蜻蛉の草茫々と一ッや
雪よ雪ふる山姥の里
星郎の文尺ちりよ秋尺ゝて
古池ゑゝと跳ねる
大木の月と根ざすよ根ざすよ
雲東方ゝ芋掘月ゝを

嵐蘭

中村俊定文庫

神の少清の面く 神嵐
切拾ふる河瀬泥坊
名を申 鶴也の拾とかう勇
俳の山冊を清人をとる
生ふ小新蕨 村をきり お
月やら鼻やら只ひとり取
人無よされも食ハまの里
なをきるも分のかハ雪を
いふ絵さすも見ひきられや
武ハ脊 骨よ拾ふ しく

ひとりとう赤子の初音哀く
春雨ふる夕 ふる夕月
月路をく蛙 約束孫溝ふり
泥流の ふる鼻ふれ童
水路よ水の岸を佐(サカ)つふり
新ふ蕨ふるの中を拾ふ
阿弥陀の影の痛を見ふ
前生ハ見 影といるふり
汁ふして今ハ狐を咬ふさハ
鬼地よ 狐拾ふ ふり

乳母は笠与右衛門杖をつきおて
むかしの家よりつる出羽
富士詣をなく月の清て存
赤ひ弼引二條のうち彼
むれて入る金沙のみち安嶋て
亟形ありある妹を恋て
玄医者の必しよきて佛体
蓮華よりつく陳皮見めて
焼うちの石色ありきある花の色
桃青の園まで一流ぬ

廿十二　揚水

まつ虹い桂川して雲とりや
田螺ハてふ雨のひきほひ
山嶺の羅(サル)よみ年寄風吹く
捨子水の松よ蹄拓たくる
仙人の碑石あれく月はのろ
雲まかえる太のをあを

秋の哀梅の形ちちるくと
菜やの鉢のうれくさしき
食樓やうれい細代のうすれ
家々と蝶よ多くもやの哀
うれさまよ教さうとうとうとも
ふつく蛍ゆりけてすゆくさうて
光こいまくさやがてうう終よ
方角の哀ぬるい草屋盛
まいりやを江戸をのよ移舞
雪の中のうぶのあられ函

前よ月よ根源のくねるつけを
小つひ性の序よ出し哀
霞色くやや新安の山ゆかうの
鏡中くあるる家朔のこと
あう味雪の伝説とさけ
くう指のあくえきやで
猪京の水きもえの水あす
辛律日東無て拓す
拓頭よ像よ今と拓行
まいけあく河極と食よ

雪よ出ておらぬ程あるし
山神くつく寿る　男
夢路のあるの月よ紙二束
ちらて正味の法ちらすて
やりちらす屋よ腐よおち葉よ
ゆるしの鈴つるし　旅
あるちらす小者一人の氏借して
引ていちらす踏ていちらす
あよ坂の宗のとまれをむてこすひ
うちあすのるの二番
たたたも

十三　嵐亭治助

霜解のおしやつる生姿味百
木の葉ちるくきる焼食
徐むしるる松とてちと湯くて
さあ元ちれ今ちる姿と
夜ハ涼し　数ハ壹　月を淀
詩ふるのてハ大ちてきて

俳諧の仙人すてき山ずみ

ゆく秋のまつの末日の雲

腸寮の雲（スカ）余のうつり形 柳

無あるあるとて雲と毛むと

ふくるうちる芙蓉の下八月地獄

紙の中つきつり蔵 久り

うつ翁の夢こハ何といふ夏ぞや

如心のくふうつる 蛍 鳥

ゆくぬ恋ふいぬ恋と夏恋

殺ようもる姿やのとせ

獄のお咒もあるをあるとく

泥（ホニ）恋の瞬（ニナミシリ） 蛙 の 餐

池の水 水の音よりちくま

ちるさ宮の覺蔵くい

杉垣の押の実たえの蛍ふく

葬の笠 死 雪 涌 ｜

西りの絵とくく雪ひ沢物多

蛙い古巣つくれさて音い

如女く蟬の初音もあるれし

竹のうちたえ雲よんゆる庵

行法大師は家やとりのひと
郭公の鳴くのうよあらられ
月と角と夕間暮して矢よりも
秋風吹くことして鹿こえのこと
猫の長刎てもつれて赤蓋京
新ハ世年の鶯水の音
森ちらけく花やつれ果ちる桜ぬ
茶つけちゃを食よりしを
花ハ見ちゃのひとつ侵をめく
梅が香こよ毎のちらくれ

井十決

鉢を糸籬の下よりて床菊よ對さと
宮ゆ菜ゆいゆうつ家を法寺　螺舎

月を医て宗素巡栖堅の名有
毒草のあり大きぶ家の傳
又毒草のあり牡丹よ
猫の胴りきとかれ
陸のつれよりつあるきを
今の夕菅のの影ひら

雅齋の庶子集まりて
是屋敷の南手まえに曰
今をかぎりつるとすれども老
母口のゆゑ身しり痛ゆゑ痛
小磐国耳の東手南れを
汗の海千の月をまるる
如まの松よりはまさるはや
ちはのまの玉手まよ泳ぎのよ
狂ちも亦氣の強やよりり
こんぶやくの松する男すりり

蕪菁の小畑
まのそらよりえ
うれ安まの鳥のすま
田螺の殼
宮殿の涙ぬ
浦波寄
まの一きよ丁の袋や夜嵐
あれ小屋小屋秋の
吟和とて信夫の千家ふさり
まる月よめてふつもあるよあ

雲もちらく行　西行やう〳〵
今度定家の江戸一下れ
東撰よ結了　蒼西（カサイ）のうきまて
牛の玉馬の社　慶ちもも
ひとふとも　蕪よ猫の作仏を
菓子屋山看板　寺〳〵号ス
らくんの嶺　松　巒ことひえ
蕎麦を蕎て　好ことくもと
雲もちり　蕎を刻こはもちり
竹神門下　ようらく坊　某

第十五　巖翁

長天も地よつきよりり庭の雪
氷のうしらぬのはつちり
河豚のは二よあるりる引のこて
坊ものさきよつる　茶屋
独箸の茶　結よ今新の月
歌の月玉をつのする夢

袂の秋白き鳥とあらはれて
両淅の廉の八つの清角
琵琶聲をきく子の筆にうれなる
枕屏風を建たる時
臥ましてハふとん華衣のうつす焼せん
可とけのちらひ内簾く
うき数よ艶の唇を占とも
廬山の雨の興東京の月
秋おもふハ五湖に川ふの夕を
なしきまやれるそ世の錦紅

吸筒ハ紅葉もやさしめるを
至白く人間の極楽の旅
悟ひより閑窓の二間戸なり
平家の年代記ハしるき
維摩よ紗の繍緞を設るへし
志ハ常に帝の幸如しん
茶の湯を古郷の坊よ移されて
静かなりを娘ふんなり
郷色と粉紅のゝうり拗よ
砂金百両 海老二十疋

大路の手寄の屋敷金界有
ハ日の内より二尺の猫
赤銅月の細を引そらめ
芙蓉二尺余にかゝれたる
秋風よりはくれをゝ焼篝
チラフト
廊の下風をそゝらり
屋敷の二の山をゆんさきて
雲と雨くゝ又雨まよ入
蚊の屑の毒ま蚊のさえつれゝ
元時ふ多方便の去

第十六　嵐窓

去ら屋や和田の宝杉下結ふ糸
第武者ゝ蔭葉本枯
千年の黄化ふ月流て
ゝ白く嘉ゝ鉢の音信
ふるゝ根芋の細鳴分切た
ふ丁ゝて山更ま

雨ならして夢の衣と濡せり
鄙にいまだ茶碗と破れ
通円の本を拾ふる扇哉
哀撰の極も言てはかるるん
梅もうる古こうふやくふこと問ん
根あらの蕪をもあれこれ
疲るも休特ならいやはくて
いもうり仏の素の月
炭ふうの孫ふふ淋しき床の浦
うわく写をよ沖の石白

門と倉庫の扉より花菖蒲
或い庵より大蘇の蕾
欲界の修羅より天姫と変られて
のこ鉢根を変ふふを
神変よ総のふひつよくもめ
ものよりぬ宝を久しうる
風ふさいてもふふ男子は酒うる
鈴の鄙を出うり出つ
稗人ふ文の色の大よ新ふく
五合地獄のあうさ面と点

古足跡猫少と成て怪あり
大如房の大地いりうち
月の杜一すじ法師二道年
風雨きふうひ霧置をハ辺り
夕紅葉赤ひ雲まて見とられ
色ハ安曇とその西風の責ら
ハトてあり間殺人 御信 光
追出撫繕の業 蒼ま茶
又ハ毒ふ又小仮子天降り
山蛇橋 作 吟よ生のうち 菜

才十七 山風竹

搭雲や 義之引拓五月雨
唐松きよんとて解山をる
拓かつらを法あ川ちあうを松よ
子細な 男 信房 あり
窓を有明方ひ四書まて御導
京の法ち対きりうを少

まつ川ゑの茶屋のおうらとぬまれて
月のうへきく夜雨ほう
雪中の紅のはとをもかし
嵐の竜ういつれおやしき
山下の二ゑのとの茶屋りく
大歌の法と行ひつて
るときりお孫れてきりう
此灯出ふあんとんのうり
京京茶屋てあ表おうりさんと
心拝粒のる粒をつる

小姫算みつる花ふうりう
月ういうりう千種ゆ夕
春の風天と笠より春出
由自の水定明ようり
山と負鏡のつうりを拾おけく
至富と山帯流を渦巻
線波矢きけ玉の麦玉仏海
多くうりハ半分ハ老武去
京京の茶の陰聖のとうり
制の日干ゑう陰てき

つよし詠を様ふ云うなて切れは
立よ枝折戸こうこう鶯あり
石階を見よもうこうき苔衣
雲ゆいとのおくのを思の釜
灯ゆいの八ゑ手のうき秋の風
ゆ手結ゑ立ゑ立ゑ上ゑ
帝都へ家暮の秋象中々
頻迦の初音一おゆてそ
ホてゆい水芭蕉ぬゆよ芭蕉く
ゆうゆうゆうの春

廿十八　北鯤

はるよ方俳し角を形れきり
徒然なる鬼を書を年忘
石の雨ゆうゆ中の形や鶯忘
かつうゆうと立四ゆうて
月にうう西ゆう声の年うう表
人の枝形を下書の序

こゝ廿万部ゝよ今まゝつの名つ
此川一注のるゝ年後くれ
小笹原牛よ帰りけくをさらん
山家のあ〜あのちをして
鈴橋と峡しき谷ゝおふふ
うつまく雪小竜の峯さ
ちのつらひよ猫奮迅の威を字い
今樊今のあれるも
みてゝ新仁と貸ゝ金しゝや
須弥よりゝ小判一両

蓑笠ゝ水入の庭のゝ
風と吹ている女郎ゝ雪
れゝ降ゝ百七九代ゝ
吹よ新人家新の米
波羅蜜を建仁寺ゝ越ゝ
ゝとゝんて八銭第小封
岩ゝ形言葉の澄とあつて
仙郎よ行ゝ用ゝけゝく
今い雪よ志紀の砂子枝枯ぬ
相生の古根の根よ立ゝ有

あるハ又弱き山より出て天を拾ひ
岩戸の稲妻の玉拾ひ
感涙抔よ坊ととりて海ゆ
まつく同ア了笛の月
初秋系地獄の百句高吟
仕舞のつゝる折りの富
夕ハ七詩鉄の折詰の淋しく
種拵の書の恵ひく手
花よりまきの死のお歌の玉海
[illegible] 蜀紅の毬

第十九　岡松

杉戸や禁ゆくゝる秋錦の信
袖ハ千枝小芋ゝ麻衣
牛の掘小川の月よりけ拵て
河の調ふきせるゝ
玉ゆ玉今和のくれを望ゝ
地ゆハあやゝき紅の毛ゝ

逆波より折れ出て竜と化す
苔むす岩に風ふきよふ
雲昊の幻の姿ようとして
怪の肉系の森さあらき雲
寺ちらす芝とりて小橋の秋の月や
萩と彩殿の翠ふる屋
訪ふ人も拍子の音ふえくる
雲腐も鶴ふ時須弥の間へ
苦汐の波ふ変ずるとれと
池洲の渡より紅葉より見ゆ

苔の力融のうよふ色せ紅
も紅葉より言せまり拾く
初紅葉つりうくれの岸雲
風ふ和筆雲を埃れり
月より面雲ぬれふ拭小寺ふ
苔と色ふる 洞の口紅
雲の中小水源の如くに来り
毛のたえさつをと産稚小多
猟人の弓ふ矢と折く西くるけ
高ぬ雲寺の鐘級ひ川

四方に菜の花の菜の葉の
縮れて
はちすの葉のさまに
大きなる尾とうとうとなる
水風呂ふ末の松山波こえて
浦々とくはなかの雪
去て船をふらるる船きよ
白仙さけ牛房大うん
苔の毛樗ぬ鶏ふ咲けく
時鳥の日うたむさく

卅二十

吟桃

鮫汁や鯨くる私宅と臣治のる
博多の白雪 俳感の桃
雲右馬 柿 嵐の桜 徹るう
岩梅一巻 屠 屠の用
裏打よ金入の雲 秋姫をし
竜の毛刷毛よ雲 河雨降

仙人の居る所は
岩まろ板をしきすの俎箸
酢を買よ行てハくる波の音
芦ヵ之の間を漕渡する
てを幕よ吹井の浦とんぐりきゝ
紅葉の遠山淋くとして
鈴木しの詩あり下屋補
老母を家よ薬 菜細
よ車の供をうしまるを伴て
笛とりをすせりひの日

未一言筆よむとふつきぬ
理屈ゝまきみ年の長
鶯の馬く先のうぐひすん
用も無もあり仮の関
むり宵ヶ弁口の海岸拾れて
山紅よまるさく蕨り酒のる
海月も絶まふ浮世の中よ
ふさりあるき君ゝ
ぬくの恋をとるつむき裏
枕のもや一歩 四五百

ある医者のくすりむすめき月蓋
井戸よ蓋する桐のちゃ夢
秋の谷言と梅よ鞠ゑんて
朝ゑもゑ　ゑ家の孤ん
家侍の長うせ山一行り
小坂の芋ふ　ちゃ庭ゑ寄る
出つゑよ雪の庭下ふゑ寄て
松の木の宮の茶物の月
よい姫ゑ蛇キ　ゑもゑ風
ゑ　ゑ書ゑゑを記ゑの恐に

延寶八歳次庚申初夏

追加　　舘子

青ゑ　踏てゑ百ぬ蛸の売
鋼ゑ桜のちゃ子　波
嵐の風河塩ゑ大干　潟
霧灰　ゑく砂ゑるゑ
砂ゑ羽幕の新国霧時て
文連ゑ人ゆゑ松の青夢

秋の夕尾上の鐘をきゝぬれば
霧立渡る寺とゝもれて
立寄て見る庵の通とゝれう
横丁の門前居貨の業
やれ〳〵あれう表接の法よ表の業
密まつれて森の下道
よりすきゝ法ゝ二ゝら
雑古更如よれかゝる家
思う測ナ七八の秋ふけく
波も四方市ゝ歳月

早稲よ新米ゝ水の池
新新まゝ皆の作
生物小鷺姫ゝれひゝう
ゝう烟ひくゝの山雲
鶏かゝ法の四列をかゝうて
紫袴濃よ羽ゝの袖
ゝう代ゝ春の里のゝひゝう
ゝもの〳〵ゝ方の金の水入
かゝゝ法やく烟ゝうゝれく
沖よゝひゝ紀美姫

あやまちてこそ清盛公
潤色 解しもあれ 松ちら
たつまつ書やうをもて雪と
ぬれしを思しき墨の衣を
ぬらす電光朝露浮生の夢乃
風邪をもちて車塵ふりて
行ゝ世をこそ清盛世の中を
蔑ゝ潤色 吉原のうりの
銀屏の絵のあの花のたちわれ
あけの袴きて諸藩武士

法華 大雅堂市谷漁
東武 山濤 金子彰
平安 田中 庚寅漁板